

## F-12 主婦の生活時間構造と自覚症状(第1報)

### —末子の年齢別生活時間—

埼玉大教育 ○稲葉 ナミ  
都立富士高 阿部 春子  
都立竹早高 藤原 澄子

1. 生活時間構造は拘束的な労働時間の影響を強くうける。主婦の家事労働は半拘束的生活であるが、これが家族構成(末子の年齢や家族員数)によってどう変わるか、また、自覚症状はどうかを知るために本調査を行なった。

2. (A)調査対象は東京都内居住者で、職業労働を持たない主婦とし、末子の年齢によって6群に分け、夫妻のみの家庭を加えて調査した。(B)調査時期は昭和43年度冬季である。(C)調査方法は就学児の家庭は家庭科教師の協力を得、未就学児の家庭は団地の住民登録簿により対象家庭を採録し、個別訪問し、両調査票の記入を依頼した。幼稚園の協力が得られなかったので、予定数を得るため小学1年生の家庭に依頼したが、有効数が少なく、幼児(2~5才)の家庭が少ない。

3. (A)子どもの年齢の小さいほど家事労働時間が長くなる傾向がみられ、0才児の家庭が平日も休日も最も長く、幼児の家庭以外とは有意差がある。(B)これと対照的に、夫妻のみの家庭は当然のことながら最も短かく、平日も休日も他の6群と有意差がある。(C)小学生の家庭は低学年と高学年に分けたが、低学年の家庭は子どもの世話・洗濯の時間が多く、高学年の家庭は裁縫・炊事などが多くなって家事労働時間としては大差がないので一括した。(D)中学生・高校生の家庭の家事労働時間には大差が認められなかった。